範馬勇次郎が行く、SCP財団の機密施設見学会

テキーラ11

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

地上最強の生物は愉悦を求める為、ＳＣＰ財団の施設をを見学するようです。

目次

1th Tale「鬼と幼女」――――――――――――――――1
2nd Tale「ダルマさんが転んだと1つ目のスライム」
8
3rd Tale「泣いた恥ずかしがり屋と笑う鬼」――――――13
Side Tale「始まらない英雄譚」――――――――――18
4th Tale「老人虐待」――――――――――――――23
5th Tale「赤い大鳥の丸焼き」――――――――――――26

1th Tale「鬼と幼女」

ＳＣＰ財団とは、ＳＣＰと呼ばれる、超常的な『現象』『物体』『存在』『場所』を『確保』『収容』『保護』を目的として、存在している秘密結社である。

そんなＳＣＰ財団は、政府よりＳＣＰの管理を任されており、それらを収容しておく為のサイトやエリアと呼ばれる機密施設を多数持っている。

そんな機密施設の１つが、ＳＣＰ財団発足以来の未曾有の危機に陥っていた。

複数のＳＣＰによる大規模な収容違反が起きていたのである。

なんとか鎮圧しようと動いていた職員や部隊は全滅し、機密施設内は地獄と化していた。

所変わって、日本某県に存在する米軍基地内、応接室にて。

そこには２人の男がおり、片方は緊張した面持ちで立っており、１人はリラックスした様に革張りのソファーに腰掛けていた。

立っているのは、一目で歴戦の軍人だと分かる風貌の男、名をストライダムという。

座っているのは、武力というものを体現し、一目で地上最強だと分からせる風貌の男、その名は範馬勇次郎。

「おいおい、ストライダム・・・・ シケた面しやがって、まさか下らねぇ話の為に、この俺をこんな場所に連れてきたわけじゃねぇだろうな。」

からかうように、ストライダムにそう語りかける地上最強の生物こと勇次郎。

「・・・・・・ オーガ・・・・ 私は、君にこの話をするべきか・・・・ 正直、迷っていたのだが・・・・」

ストライダムはそう前置きし、真剣な顔をしながら切り出す。

「・・・・・・ オーガよ・・・・ ＳＣＰ、または、ＳＣＰ財団というのは知っているかね・・・・ ？」

「ああ？・・・・・・ 戦場の傭兵共を誘ってる連中が、そんな名を言っていた様な気がするが、詳しくは知らねぇな。」

勇次郎は聞きなれない言葉に、記憶を巡らせそう答える。
「だろうな……　ＳＣＰ及びＳＣＰ財団というのは……　そう、分かりやすく言えば、超常現象や超常の存在の通称、そして、それを管理している組織だと思ってくれればいい。」
勇次郎の答えに、どう説明すれば良いか迷いながらも語るストライダム。
「……　なに？……　ついに、頭がイカれちまったのか？ストライダムよ。」
ストライダムの突拍子も無い説明に、笑いながらそんな事を聞く勇次郎。
「……　だから、話したく無かったのだ……　いいか、オーガよ。この組織は実在するのだ。……　それも政府公認の組織としてな。」
ヤレヤレといった様子で、しかし真剣な表情で話すストライダム。
「ほう……　で？そのオカルト組織が、なんだってんだ？」
ストライダムとの付き合いが長い勇次郎は、嘘は言っていないと悟り、続きを促す。
「実は、そこで大規模な収容違反……　つまり、ＳＣＰの大量脱走が起きたのだ。そこで……」
「ストライダム……　まさか、この俺にそのオカルト組織の尻拭いをしろと？」
ストライダムが言い終わる前に、青筋を立てた勇次郎が静かな怒りを宿しながらストライダムに圧力をかける。
「ま、待ってくれ！もちろん、無理強いなどしないし、出来ん！……　だが、私も詳しくは把握してないが……　ＳＣＰはその殆どが凶悪極まりない戦闘力を誇っているそうだ……　どうだろうか、君にとっては楽しい場所だと思うが……　もしかしたら、戦場以上にね。」
慌てて勇次郎を宥めながら、説明を続けるストライダム。
「なるほど……　どうせ、トラムプ辺りからの要請だろう？……　伝えておけ、もし俺が満足出来なきゃ……　アメリカ軍を喰らいに行くとな。」

ストライダムの言葉を聞き、見透かした様にそう話す勇次郎。
「わ、わかった。そうならない様に、私は祈るとしよう……　さて、早速飛ぶかね？」
「ああ、ＳＣＰとやら、堪能させてもらうとしよう。」
勇次郎がそう締めくくり、２人は輸送機のＣ―１７、通称グローブⅢに乗り込む。
しばらく空の旅を楽しめば、問題の財団施設上空に近付く。
「じゃあ、施設見学と洒落こんで来るぜ。」
「ああ、楽しんで来るといい。」
勇次郎とストライダムはそう言葉を組み交わせば、勇次郎は飛び立った。
「キャプテン……　本当に良かったのですか？」
付き添いの隊員がストライダムにそう問いかける。
「もちろんだ。オーガは、如何なる軍の爆撃なんかよりよっぽど強力なのだよ。化け物どもは思い知る事になるだろう……　地上最強とはどういう事かをな。」
高度３０００ｍからのスカイダイビング中の勇次郎。
目標は森林地帯にある放射能汚染があるとされる地域。
無論、これは財団側のカヴァーストーリーであり、機密施設がある場所だ。
鬱蒼と生い茂るジャングルの上空を落下していく勇次郎の背中には、パラシュートが存在していない。
パラシュート無しの、３０００ｍからの自由落下。
通常、この状態での地面への激突は死を免れない。
しかし、ほんの数例ではあるが、奇跡的に助かった者はいる。
例を１つあげるなら、ヴェスナ・ヴィロヴィッチ氏の生還劇だろう。
１９７２年、ＪＡＴユーゴスラビア航空機が上空１万ｍにて爆破される事件が起きた。
その航空機に搭乗していた客室乗務員、当時２２歳のヴェスナは１万ｍ上空に投げ出され地面に激突。
しかし、落下場所が森林地帯であり湿地という事もあり、それらが

クッションとなり奇跡的に生還した。
さて、ごく普通の女性が助かったのと似た条件に、高さはその３分の１以下。
そして、落下していくのは地上最強の生物である勇次郎。
この条件を元に範馬勇次郎という地上最強の生物は死ぬだろうか？怪我を負うだろうか？
答えは、否である。
勇次郎は、木々をクッションにしながら、地面に見事着地するのであった。
「ここが、財団の施設とやらか。」
勇次郎の１０ｍ先には、大規模な収容施設と思しき建物があった。
巨大なゲートは重々しく閉じられており、何人も寄せ付けないという頑強さがある。
「お邪魔。」
勇次郎はゲートの僅かな隙間に、まるでゼリーにでも指を突っ込むかのように隙間を捻じ開ける。
そして、十分に手が入った所で、その桁違いな腕力で持って無理矢理こじ開け中に入る。
幾重にも施されたロックをものともせず、中へ入って行く勇次郎。
「おいおい、こりゃぁ……!?」
さしもの勇次郎も、中の光景には驚くしか無かった。
中には職員や鎮圧部隊と思われる死体の数々があったが、そんなものに驚く勇次郎では無い。
では、勇次郎を驚かせたものとはなんだったのか？
それは、財団の実験によって引き起こされたワームホール現象にあった。
分かりやすく言ってしまえば、広大な施設が、幾つもバラバラに繋がっていたのだ。
「なるほど……　ＳＣＰとやら、存外に楽しめそうだ。」
そんな状況でも、愉しそうに笑う勇次郎。
しばらく進むと、この血なまぐさい場所に似つかわしくない、推定

３、４歳の幼女が立っていた。
幼女は怯えた様子で震えながら泣いていた。
場所こそ似つかわしくないが、反応そのものは幼女のそれであり、故に不自然さはそれ程無いようにも思える。
しかし、その幼女こそ勇次郎が初めて目にするＳＣＰであった。
アイテム番号：ＳＣＰ―０５３、オブジェクトクラス：　Ｅｕｃｌｉｄ、通称幼女。
この幼女は見た目、性格、反応、どれを取っても一見すればただの幼女だが、その能力は凶悪極まりない。
この幼女と１０分以上視線を合わせる、または物理的接触をすると激しい被害妄想に取り憑かれ、周りの人間を敵と誤認し殺害しようとしてしまうのだ。
そして、最後にはこの幼女にも手をかけ、その後に心臓発作を起こし死んでしまう。
なお、幼女は攻撃されても瞬時に傷が塞がり、ほぼ不死と言える。
「おい、そこのガキ。迷子にでもなったか？」
勇次郎はそんな事を知る由もなく幼女に近付き、頭の上に手を置いてしまう。
すると、途端に勇次郎の胸中に激しい被害妄想が湧き上がってくる。
常人ならばこの時点で幼女に手をかけ、殺そうとしていただろう。
しかし、相手はあの範馬勇次郎なのである。
地上最強の生物である彼にとって、自分の命を脅かすという恐怖は微塵も存在していない。
にも関わらず、勇次郎の脳内では目の前の脅威である幼女を殺せと叫んでいるのだ。
（（殺せ、殺せ、殺せ、殺せ、殺せ、殺せ、殺せ、殺せ、殺せ、殺せ、殺せ、殺せ、幼女を殺せ、目の前の敵を殺せ、やつを生かしておけば殺される、だから、殺せ、殺せ殺せ殺せ殺せ殺せ殺せ殺せぇぇぇぇ!!!））
勇次郎は自分の強さに、信仰心とも言える自負心を持っていた。

故に、脳内の叫びは自身のものでないとすぐ様看破した。
ならば、叫びの主は目の前の幼女に他ならない。
だが、幾万とも呼べる死闘の中で鍛え上げられた勇次郎の洞察力はその先を見据える。
すなわち、幼女の中に存在するもう1つの何者か。
勇次郎はその何者かを鬼そのものの形相で睨みつける。
そこに言葉は無く、そして言葉はいらなかった。
勇次郎は赤子の頃、産婆に対して言葉を介さず脅迫し、母に言葉を介さず命令したのだ。
赤子の頃に出来て、今は出来ないという道理、勇次郎には存在しない。
故に、言葉を介する事無くそれを伝えた。
（この俺に、命令するかッッッ!!!貴様ッッッ!!!!!）
それは、どんな叫び声よりも大きく、どんな脅しよりも恐ろしかった。
勇次郎のそのオーラに、言葉より雄弁な命令に、その何かは従わざるを得なかった。
と、同時に、幼女は恐ろしさから泣き声をあげようとする。
「泣くな。」
勇次郎のたった一言の命令。
それは、幼女の本能が、拒否を許さなかった。
故に幼女は泣き声をあげることなく我慢した。
「ふん、泣かなかったのは褒めてやる。褒美をやろう、こっちに来い。」
幼女は勇次郎におずおずと近付くと、勇次郎は幼女の頭をくしゃくしゃと撫で、肩車をしてやる。
「わぁー、たかーい！ありがとー！」
幼女は、初めて体験する肩車に楽しそうに笑い、はしゃぎ、感謝を述べる。
「ふっ、誇れ、この範馬勇次郎に肩車をして貰ってるんだ。」
勇次郎は幼女の感謝に、満更でもなさそうな笑みを浮かべて進む。
「こっ、いえ！」

勇次郎に肩車をされながら進んでいた幼女は、自身の収容室を見つけ指差した。
「そうか、なら、ここでお別れだな。」
勇次郎は幼女を下ろしてやると、別れを告げる。
「うん……ばいばい……」
勇次郎と離れる事になり、しゅんと寂しそうな顔をして俯く幼女。
「……わたしがおっきくなったら、およめさんにしてくれる……？」
そして、勇次郎を見つめながら、そんな言葉を続けた。
「なっ……ふ、ははははは!……お前が成長し喰うに値すると判断したら、その時は迎えに来てやる。」
突然の幼女の言葉に一瞬唖然とするも、高らかに笑いそんな約束をして幼女の収容室を後にする勇次郎。
そして、先に進むとそこには奇妙な生物を模したコンクリートの彫刻があった。

２ｎｄ　Ｔａｌｅ「ダルマさんが転んだと１つ目のスライム」

今現在、ＳＣＰ財団施設内に侵入した勇次郎の目の前には２ｍを超える頭でっかちな人型の石像があった。
顔の部分には緑の目にも見えるペイントと、赤と黒のペイントが不気味な顔を模しているようにも見える。
見た者に、言い知れぬ不気味さと恐怖感を与える見た目のこの奇妙な彫刻。
その彫刻の正体は、危険極まりないＳＣＰだった。
アイテム番号：ＳＣＰ―１７３、オブジェクトクラス：　Ｅｕｃｌｉｄ、通称は彫刻―オリジナル。
この彫刻は鉄筋とコンクリートで構成されており、特筆すべき点はこの彫刻は生きているという事だ。
目視されている際は、一切動く事は無いのだが瞬きなどの一瞬の時間でも目を離すと動き出す。
そして動き出したが最後、常人には到底反応出来ないスピードで頚椎を圧断もしくは絞殺という敵対的な行動に出る。
「ふん、趣味の悪ぃ彫刻だぜ。」
勇次郎は当然そんな情報を知らず、マジマジと見た後そんな感想を漏らし視線を外す。
その瞬間、彫刻は勇次郎の頚椎を破壊しようと動き出す。
しかし、相手は地上最強の生物である範馬勇次郎なのだ。
長年の戦場生活や戦闘の中では敵に不意打ちされる事など日常茶飯事である。
故に、相手の闘志や殺意を感じるセンサーは野生動物のそれを遥かに凌駕した性能である。
そして、そんな高性能なセンサーが搭載されているのは、地上最強の肉体なのだ。
その結果、彫刻が勇次郎の頚椎に攻撃を仕掛けるよりも先に、その

超反応により彫刻を見据えていた。
「貴様、今動いたな……？」
悪魔的なオーラを発しながら、彫刻を見据える勇次郎。
「なるほど……見られている間は動かないみてぇだな。抵抗せぬ無機物を破壊した所で、なんの意味も持たん。良いだろう、好きなだけ攻撃してこい。」
勇次郎はそう言うと、あろう事か目を瞑ってしまう。
彫刻は再度、瞬時に動き出し勇次郎の首をその鉄筋コンクリート製の両手でもって締め上げる。
常人であれば、窒息どころか頚椎は砕け、果て首は圧断されてしまうだろう。
首は本来頚椎や頸動脈等の急所が集まる場所である。
故に、硬い骨の周りを筋肉が覆い防御されている場所でもあるのだ。
そんな場所を丸みの帯びた両の手で圧断してしまうこの彫刻は如何程の力を持っているのだろう。
だが、肝心の相手の首は地上最強の生物の首なのだ。
３０ｍ級の象すらも屠り去るこの雄の筋力の頑丈さは如何程のものだろう。
両者がぶつかり合った結果、勇次郎は骨折はおろか窒息すらもしていない。
それは彫刻が力を抜いているという事では決してない。
何故なら締め上げる音が周りに響いているからだ。
それは、人体と鉄筋コンクリートが奏でられる様な音では無かった。
鉄筋コンクリートが金属に擦り付けられる様な、重く低い摩擦音だ。
そして、突如として彫刻はその身を勇次郎から遠ざけた。
鉄筋コンクリートで出来たその両腕は、歪な半円に削れていた。
勇次郎の桁外れの首の頑強さに、彫刻の耐久力が持たなかったのだ。

「どうした?·もう、終わりか?·」
勇次郎の挑発に、彫刻はその超スピードを持って攻撃を開始する。
自ら視覚を封じ、さらには鉄筋コンクリートの塊に殴打される勇次郎。
何処から攻撃が飛んでくるか分からない状況、そして彫刻の攻撃の全ては一撃必殺の威力を誇る。
だが、そんな状況の中でも、2発の直撃から先は彫刻の攻撃は空振り始める。
彫刻は勇次郎に一撃を放っては離脱するというヒットアンドアウェイ戦法に出ていた。
だが、それも突如終わりを告げる。
それは攻撃を躱していた勇次郎の顔面に、彫刻の一撃がモロに直撃した瞬間に起きた。
目を瞑ったまま彫刻の一撃を顔面で受け止めると同時に、彫刻の首辺りを鷲掴みにしたのだ。
「なかなか美味そうだ。喰うぜ!!」
勇次郎の指先に力が込められていく。
通常の鉄筋コンクリートよりも頑強なのか、彫刻の首はゴリゴリと軋む音を立てて耐えるがやがて砕ける。
首が砕けるも、彫刻はまだ動けるようで勇次郎に襲い掛かるが叩かれ、蹴られ、砕けていく。
足と腕を1本ずつ失った頃、攻撃が止んだ。
勇次郎は攻撃が来ない事に気付き、目を開けると彫刻は土下座の形で固まっていた。
「ふん、中々愉しませて貰った。」
そうとだけ言い残すと、止めは刺さず先へと進む勇次郎。
全力でやり合い、降伏を示した事で見逃した様だ。
その後、彫刻は手足が千切れ、首の一部が砕けるも、数日後には修復していた。
ともあれ、彫刻は地上最強の生物、範馬勇次郎の前に敗れ去ったのだった。

またしばらく歩き続ける勇次郎の前に、奇妙な１つ目の車輪が付いた生物が目の前で壁に激突する。
某ＲＰＧに登場するスライムを１つ目にして車輪を付けた様な見た目のその生物は言わずもがなＳＣＰだ。
アイテム番号・ＳＣＰ―１３１、オブジェクトクラス・Ｓａｆｅ、通称アイポッド。
ＳＣＰにしては珍しく、友好的なアイポッドは勇次郎を見つけると甘える様に擦り寄る。
勇次郎は最初の方こそ、どんな性質かを見極める様に観察していたが、敵意が無いのが分かり無視して歩く。
だが、勇次郎に着いて周り、擦り寄る姿に多少の可愛らしさを感じたのか撫でてやる。
「奇妙な見た目ではあるが、なかなかどうして、可愛いもんじゃねぇか。」
そんな事を言えば、しばらくアイポッドと一緒に施設内を探索する。
しばらく、歩き回りながらアイポッドとじゃれたりしていると、不意にアイポッドが勇次郎の周りを回りだす。
その姿は、必死になって何かを伝えようとしている様だ。
「なんだ？・俺に何を伝えようとしている？・」
アイポッドはどうやら勇次郎を制止しようとしているようだが、勇次郎は構わず先に進もうとする。
すると、アイポッドは勇次郎より先に次の部屋へと入ってしまう。
すると、何やら金切り声のような泣き叫ぶ様な声が聞こえ、その直後にアイポッドが全速力で飛び出してくる。
しかし、アイポッドはまたも勇次郎の目の前で壁に激突し、何かに怯えた様に震えている。
すると、何かの叫び声は止まり、次いで超高速の人型の何かが勇次郎の目の前を過ぎ去りアイポッドに襲いかかる。
「良く連れて来た。後は任せな。」
アイポッドに襲いかかる人型の何かの頭を鷲掴みにしてぶん投げ

る勇次郎。
　その人型の何かは、酷く痩せ細り、異様に長い腕をしていて顔を手で覆い隠しながら再度叫ぶ。

３ｒｄ　Ｔａｌｅ「泣いた恥ずかしがり屋と笑う鬼」

ソレの叫び声は人間の声ではあるが、野獣の様でもあり、猿叫というものが１番近いと言える。
そんな誰しもが、迫力と狂気と殺気が入り交じった叫び声には恐怖をおぼえるだろう。
だがこの男、勇次郎は怯えるどころか、この先の愉しみを見据えてか、笑っていた。
そもそも恐怖とは、自身に対する危機感を感じた時に現れる感情なのだ。
地上最強の生物である勇次郎にとって、自分以外は弱者であり、恐怖など感じようが無かった。
叫び声が止んだ瞬間、ソレは勇次郎に飛びかかっていく。
ソレの正体はアイテム番号：ＳＣＰ―０９６、オブジェクトクラス：Ｅｕｃｌｉｄ、通称：シャイガイ。
この、シャイガイというＳＣＰは自身の顔を見た者を殺害するという習性を持っている。
戦闘力はＥｕｃｌｉｄでありながら、ｋｅｔｅｒを含めたＳＣＰの中でもトップクラスである。
さらに厄介なのは、映像や写真で、たとえ知覚せずとも、４ピクセル程であろうとも、顔を見た者は必ず殺害する。
ある１例のＳＣＰを除いて生き残った者はおらず、対戦車砲やミニガンの掃射にも怪我１つ負わない。
シャイガイは勇次郎を引き裂こうと、指先を振るう。
それは、人間を紙くずの様に引き裂いて来た必殺の一撃だった。
しかし、勇次郎に当たるも、金属同士がぶつかり合うような音を立てながら勇次郎は無傷だった。
そこへ、勇次郎の反撃の右ストレートがシャイガイの顔面を捉えシャイガイは吹き飛ぶ。

だが、シャイガイは壁をぶち破りさらに転がるも、すぐ様立ち上がり襲いかかる。
先程よりもスピードが増したシャイガイの攻撃の全て最小限で躱し、今度はハイキックがシャイガイの顔面を捉える。
再度、シャイガイは吹き飛び、それでも勇次郎へと挑み掛かっていく。
シャイガイのスピードはさらに上がり、果敢に勇次郎攻め立てるが、その都度勇次郎にカウンターを決められる。
シャイガイは引っ掻き以外に、噛み付きや殴打といった攻撃方法も用いる。
幾度と無く攻めれば、次第にシャイガイの攻撃が勇次郎に当たり始める。
何度も攻防を繰り返していけば、遂に勇次郎に多少の痣を作るに至る。
しかし、シャイガイはその何十倍ものダメージが蓄積し、動きも鈍くなっている。
まったく弱らない勇次郎を前に、シャイガイはかかと落としを喰らい遂にダウンを喫する。
すると、シャイガイは心が折れたのか、自身の顔を手で覆いながら泣き始めた。
「おいおい、どうしたぁ?そんなに顔を見られるのが嫌なのか?」
ニタニタと笑みを浮かべながら、部屋の隅で顔を隠し泣いているシャイガイに近付く勇次郎。
「見るなと言われると見たくなっちまう・・・・・ 貴様の面、拝ませて貰うぜ。」
そういうと勇次郎はシャイガイの胸を右足で踏みつけ、両手首をしっかりと握る。
そして、シャイガイの腕を力いっぱい引っ張っていく勇次郎。
シャイガイも必死に抵抗するが、為す術なく顔から手をひっぺがされる。
さらに、シャイガイの腕は引っ張られ、どうやら勇次郎は引き千切

るつもりらしい。
「なかなか、丈夫じゃねぇか。」
そういうと勇次郎はさらに力を込め、血管が浮き出て力こぶは隆起し、踏み締めにより、床には亀裂が生じる。
金属が軋むような音と車のタイヤが引き伸ばされる様な音がし始める。
勇次郎の服が破け、打撃筋の異常発達による背中に鬼の貌が現れると嫌な音を立ててシャイガイの両腕は肩から千切れた。
「ふはははははぁ!!それが、貴様の顔かッッ!?確かに、醜過ぎて隠したくもなるよなぁ?あーッッはははははッッ!!!」
勇次郎は破顔しながら、盛大にシャイガイを嘲り笑い罵倒する。
シャイガイは隠す事も出来ずに、ただひたすらに泣く事しか出来なかった。
ひとしきり笑い飛ばすと、最後にシャイガイの顔面にかかと落としを入れてからその場を立ち去る勇次郎。
後日、シャイガイの頭は、完全に床に埋まった状態で発見される。
収容され暫くすると腕は治ったが、更に時間が経過するとオブジェクトクラスｓａｆｅに格下げされた。
何故ならば、実物、映像、写真に至るまで絵画以外の媒体で勇次郎の姿を見ると怯えて蹲る様になったのだ。
シャイガイの部屋には勇次郎の写真が壁一面に貼られ、モニターには勇次郎が映っている。
シャイガイは四六時中、部屋の隅で頭を抱えながら震え、泣いているだけだった。
時間は巻戻り、勇次郎は施設内を更に探索していると、名状し難い変な人型を見かける。
こいつはアイテム番号：ＳＣＰ―２６６２、オブジェクトクラス：ｋｅｔｅｒ、通称：クトゥルフ　ふっざけんな！
約４ｍ程の体躯を持ち、背中に触手が２０本も生えた人型生物である。
オブジェクトクラスはｋｅｔｔｅｌと危険な存在ではあるが、本体

は至って常識的な感性を持つ。
また本体にはあまり戦闘力は無く、どちらかというと無意識に起こしてしまう事象が危険なのだ。
そんなクトゥルフは収容にもかなり協力的で、収容違反も起こそうとはしない。
では、何故今、クトゥルフは収容室から出て恐る恐る周りを伺いながら歩いているのか。
それは、クトゥルフの収容室の扉が開いたままで、職員の悲鳴などが響き渡っていたためだ。
最初はじっとしていたが職員の悲鳴が止んでも開いたままなので、様子を見に来たのだ。
そして、クトゥルフは廊下の角から覗き込むと勇次郎と目が合ってしまう。
その瞬間、クトゥルフは勇次郎の戦闘力を見抜き、刹那にも及ぶ動きを見せる。
膝を折り畳み、手を床につき、頭を更に下に擦り付ける、それはそれは美しい土下座だった。
「お願い致します！我は貴方様と争う気は毛頭ありませんので、見逃してください！お許し下さい！殺さないで！」
矢継ぎ早の命乞いに、最初は訪れる愉悦に身構えていた勇次郎だが、さすがに、戦闘態勢を解く。
「おい、テメェ。ここの奴らに……」
勇次郎が何か言いかけるのを遮るように、数人の人間が仔牛を連れて現れる。
これらは、クトゥルフの特殊能力信者召喚によるもので、クトゥルフの意思に関係なく現れる災害の様なものだ。
「くそっ……！こんな時に……」
空気を一切読まない信者に対して、苛立ちを隠す事が出来ない。
「……」
しかし、信者の様子もおかしく普段ならすぐ様儀式等を執り行うが、微動だにしない。

何故なら勇次郎が信者達を見据えて無言で睨みつけていたためだ。
精神が狂った信者達にもこの場の絶対者が分かるようで、身動き出来ずにいた。
「……　失せろ。」
勇次郎が信者達に短くそう告げると、信者達は一目散に去っていった。
「す、すげー……」
幾度となく信者達に接近され散々な目に合っていたクトゥルフは感嘆していた。
「邪魔が入ったが、続けるぞ。テメェは、ここの奴らに詳しいのか？」
「す、すみません…　我は、収容されている身なので、あまり詳しくはありません……　幾つかは知っていますが……」
勇次郎の再びの問いに、我に返ったクトゥルフはそんなふうに答える。
「なら、テメェが思う1番強そうな奴の所へ連れて行け。」
勇次郎が端的にそう伝えれば、クトゥルフは案内を始める。
暫く歩くと厳重そうな扉と、分厚い防弾ガラスの先にある、宙に浮いたコンテナを見つけた。

Ｓｉｄｅ　Ｔａｌｅ「始まらない英雄譚」

勇次郎が、財団の施設を半ば見学でもするかの様に楽しんでいる頃、東京某所の借家にてそれは起こった。

この家の住人である１８歳の少年が、帰宅してそれに気付いた。

この少年一見すると普通の高校生の様に見え、顔は整っており、某名前が強そうな女性タレントに似ている。

だが、問題はその下に隠された凝縮された人間離れした肉体にある。

大小様々な傷があり、無駄な肉は殆ど存在しない超肉体であり、一瞬にして強いと分からせる肉体である。

この少年こそ、東京ドーム地下闘技場最年少チャンピオンであり、あの範馬勇次郎の実子である、範馬刃牙だ。

そんな、刃牙は自宅の郵便ポストに入れられている謎の黒い本を前に、困惑の表情を浮かべていた。

「なんだこれ・・・・？新手の聖書とか・・・・？」

そんな独り言を呟きながら、その黒い本を手に取って見ようと触れる。

その瞬間、刃牙はこの世界から忽然と姿を消してしまった。

そして、黒い本はポストから落ちてタイトルが明らかになる。

『地上最強の生物に殺されかけた息子を命を賭けて救った、愛と勇気を持った母親の英雄譚』

この黒い本こそ、アイテム番号：ＳＣＰ―２６８―ＪＰ　、オブジェクトクラス：　Ｅｕｃｌｉｄ、通称：終わらない英雄譚なのである。

この終わらない英雄譚は、命を犠牲に救われたＡとＡを救ったＢに対して異常を起こすＳＣＰだ。

内容は、Ａがこの終わらない英雄譚に触れると、この本の中に閉じ込められ、そこに死んだ筈のＢが現れる。

そして、Ａの危機的状況に、ＢがＡを助けるかどうかの選択を迫られるのだ。

Ａを救うために、Ｂは命を賭けねばならず、救ったとしてもまた、同じ状況の繰り返しとなる。
そして、Ｂには死んだ時の苦痛や恐怖を覚えたまま、また、選択を迫られる。
仮に、Ａを助けなければ、Ａは死体となって、終わらない英雄譚の横に現れ、タイトルがＢを侮辱するものに変わる。
とどのつまりは、Ａ、Ｂ共に救われないという胸糞悪いＳＣＰなのである。
刃牙はそんな終わらない英雄譚に取り込まれ、目を覚ますと、縄で拘束され地面に横たわっていた。
だが、刃牙はそんな事よりも、自身の傍らにいる女性に目を奪われていた。
「か、母さん・・・・ !?」
そう、刃牙の傍らにいたのは5年前、勇次郎から刃牙を庇って死んだ彼の母親である朱沢江珠だったのだ。
「ば、刃牙・・・・ 刃牙なの!?」
驚く2人を他所に、どこからともなく、声が響き渡ってくる。
『縄で拘束された少年の頭上から鉄骨が大量に落ちてくる。誰かが庇わなければ死んでしまうだろう。』
そんなナレーションとも言える、説明口調で2人は鉄骨がビルから落ちてくるのに気付く。
「刃牙っ!!」
「離れてろッッ!!母さんッッ!!!」
我が子を助けようと、近付こうとする江珠に、刃牙はそう怒鳴ると、縛られていない足で立ち上がり、鉄骨を蹴り飛ばす。
５７本目の鉄骨を蹴り飛ばした所で、刃牙と江珠の視界は暗転する。
これは、２人がダメージを負ったからでも、死んだからでもない。
英雄譚がこれは、危機的状況になり得ないと判断し新しいシチュエーションを用意したためだ。
次のシチュエーションは、超高層ビルから落ちる寸前の刃牙とそれ

を助けようとする江珠。
ナレーションの様な声曰く、刃牙を助ければ江珠は落ちるらしい。
だが、刃牙はこう江珠に伝えた。
「大丈夫だよ、母さん。」
そのまま、落ちていく刃牙は、落ちていく途中でビルを蹴ると、車の上に衝突する。
以前にも同様の事があり、その時と結果は変わらず、無事に生還したのだった。
これを受け英雄譚はまた、別のシチュエーションを用意する。
今度は、火災の発生した牢屋に閉じ込められる江珠と刃牙。
耐火スーツは1つしかなく、江珠が犠牲になり、刃牙に着せろとでもいう様なシチュエーションだ。
だが刃牙は念の為、江珠に耐火スーツを着せると、コンクリートの壁をぶち破り、無事に2人で脱出する。
すると、またシチュエーションが変わり、今度は、銃火器を持った数人の男達に囲まれる刃牙と江珠。
刃牙は、江珠を伏せさせると、瞬く間に全員を返り討ちにする。
その後も、ライオンの群れを倒し、虎を倒し、電車には見よう見まねの消力（シャオリー）にて対処した。
英雄譚が課す、無理難題の尽くを、刃牙はその肉体を武器にねじ伏せていった。
そして、今、現在、刃牙はある男と対峙していた。
「む、無理よ……　絶対に勝てるはずがない……」
江珠は、半ば絶望したかのようにフラフラと立ち上がり、刃牙を庇おうとする。
「邪魔しないでくれッッ!!母さんッッ!!」
そんな江珠に、刃牙は声を荒らげてそう伝える。
「久しぶりだなぁ……　親父ィイ……　いや、昔の親父か……」
刃牙が対峙しているのは、範馬勇次郎その人だった。
「少し、前から不思議だったんだ……　独歩さんやピクルや武蔵さんやオリバさんや花山さん……　みんなに、襲いかかられれば、俺

だって敵わないのにって……　でも、漸くわかった……　出てくる危険やシチュエーションは、母さんの記憶や想像以上の事はできないみてぇだな……　？」

そう、今対峙しているのは、刃牙が１３歳の頃の範馬勇次郎なのだ。

「やめなさいッッ!!刃牙ッッ!!」

勇次郎に立ち向かおうとする刃牙を泣いて止める江珠。

だが、しかし……

「大丈夫だよ、母さん。親父の最高潮があの頃のままなら……　俺は、あんなに苦労しなくて済んだはずだから。親父が本当に凄いのは、膨張し続ける宇宙の如く、成長する所……　ってのは、ストライダムさんの言葉だけどね。」

そういうと、姿勢を低く構える刃牙。

「行くぞッッ!!!!親じィ～～!!!!」

そういうと、放ったのは、刃牙のオリジナル技の１つ、蜚⊠（ゴキブリ）タックル。

筋肉を気化させる程のイメージ力で超脱力した筋肉は、初速から最高速度を叩き出す。

そのスピード、実に２７０キロッッ!!!!新幹線に匹敵するッッ!!!!

その速度で勇次郎を吹き飛ばし、更には追撃で、顎の皮のみを掠らせる超絶なテクニックによる打撃。

今の勇次郎ならいざ知らず、愚地独歩との戦いで打撃を避けられなかった頃よりも前の勇次郎では、当然避ける事が出来ず倒れ伏すのみ。

勇次郎を倒すと、不思議な事に刃牙の身体が、霧のように消えていく。

「どうやら、全て終わったみたいだね……」

「刃牙……　こんなにも強くなったのね……　私は、母親として、貴方に何もしてこなかった……　許されるとは思ってないけど……」

江珠が謝ろうとするのを、刃牙は制して、言葉を続ける。

「母さんは、親父から命懸けで、俺を守護（まも）ってくれました……　あれ

だけで俺には十分すぎます……　今の俺があるのは、貴方のお陰です。」

刃牙はそう言って江珠に頭を下げた。

そんな刃牙を抱きしめる江珠は泣きながら、笑っていた。

そして、刃牙の身体は完全に霧散して、英雄譚の中から消えた。

こうして、現実世界に戻ってきた刃牙は日付を確かめるが、あれから1日も経過していなかった。

それは、英雄譚の用意したシチュエーションを全て、救助される側の刃牙が乗り切ってしまったからだろう。

そして、英雄譚の題名も大きく変化していた。

『なろう系も真っ青なクソ厨二野郎がただオナニーの如く活躍した気になってるだけの物語にすらなっていない読む価値がミジンコ程もない糞の塊』。

４ｔｈ　Ｔａｌｅ「老人虐待」

宙に浮かんだコンテナには穴が空いており、その下には腐っていて今にも朽ち果てそうな老人がニヤついていた。
その老人の正体は、アイテム番号：ＳＣＰ―１０６、オブジェクトクラス：　Ｋｅｔｅｒ、通称オールドマン。
触られただけで腐食性の粘液を触れた個体から溢れ出させ、耐腐食加工のされたものも関係なく腐らせる。
さらには、ポケットディメンションと呼ばれる異空間を作り出し、経由する事で瞬間移動が可能なのだ。
それ故に、危険度がとてつもなく高いＫｅｔｅｒクラスに分類されている。
そんなオールドマンが勇次郎へと近付くと、勇次郎も近づいて行く。
だが、触れられる直前でその危険性に気付いたのか、勇次郎は飛び退いてしまう。
それはまるで、大擂台賽の時の郭海皇への反応に似る。
そして、オールドマンの笑みも、言葉はなくとも嘲り笑う様子が見て取れる。
『おやおや、こんな老人に触られるのがそんなに怖いかね？』
少なくとも勇次郎にはそんなふうに感じ取れた。
勇次郎は壁に追い詰められるが、オールドマンのパンチとも呼べぬ接触を避ける。
すると、壁がみるみる腐食していくのが分かる。
「このタヌキが、そんなこったろうと思ったぜ・・・・」
その壁の様子に、勇次郎は凶悪な笑みを浮かべる。
「なるほど、ジジイ・・・・　テメェに触れば、腐るわけだ。だが、触らねば、何も出来ないのも同じ・・・・　ほれ、触ってやるよ。」
あろう事か、勇次郎はそう宣言すると、握手でもするかのようにオールドマンの手に触れた。
だが、流石は勇次郎の超肉体、普通の人体とは段違いである。

なにせ、すぐには腐食が始まらなかったのである。
これには2つの大きな理由が存在している。
1つは、勇次郎の皮膚組織の驚くべき頑強さにより、腐食しにくくなっていること。
2つ目は、勇次郎の体内の白血球等の免疫細胞が、赤子にしてイチゴヤドクガエルの毒に打ち勝つ程強力な事。
だが、それはあくまでも遅延であり、腐食は確実に勇次郎の身体を蝕んでいく。
「……血を流すなどいつ以来か……だが、テメェの腐食のカラクリは読めたぜ！」
そういうと、勇次郎は腕を目に見えぬほどの、マッハのスピードで振る。
すると、オールドマンの粘液は摩擦熱と風圧により、蒸発させられた。
「テメェの体液は、くっついたもんを糧に増殖と腐食を繰り返していく。なら、その前に吹き飛ばしちまえばいいだけの事。カラクリさえ分かれば、簡単なもんだったぜ、ジジイ。」
勇次郎の言葉に、下卑た笑みはなりを潜めるオールドマン。
どころか、対峙していた勇次郎に背を向けて逃げ出した。
「この……クソジジイッッ!!!」
勇次郎はそんなオールドマンに、髪の毛を逆立てブチギレる。
その怒りの理由は、敵前逃亡に寄るところも大きいが、友人とも呼べなくもない郭海皇とオールドマンを重ねてしまった羞恥心もあった。
勇次郎はオールドマンの正面に周り込めば、思いっきりハイキックをぶちかます。
ボロ雑巾のように吹き飛ぶオールドマン。
足を1度、振り回して粘液を蒸発させてから、今度は渾身の右ストレート。
オールドマンの顔はぐしゃぐしゃになるが、まだ生きているらしい。

オールドマンは、何とかポケットディメンションを作り出し中へ逃げ込むが、勇次郎も追っていく。
ポケットディメンション内は狭い部屋へと繋がっていた。
ここでまた、オールドマンに笑みが戻る。
「なるほど、狭い部屋ならば、貴様の体液をよける術がないと？笑わせる。小細工は嫌いだが・・・・」
そういうと、1度だけ見た事のある、天才空手家愚地克巳の生み出した技を使う勇次郎。
通称当てない打撃とよばれ、マッハの真空波を相手に当てる技だ。
だが、あまりのスピードに克巳の腕は持たなかった。
しかし、勇次郎の身体はそれに耐え切ってしまう。
当てない打撃を受け、オールドマンはもんどり打っていた。
「安心しな、こいつはもう使わねぇ、俺の流儀じゃねぇ。」
そういうと、勇次郎は背中に異常発達した打撃筋による鬼の貌を浮かび上がらせる。
そして、超スピードで殴り飛び散る粘液を避けながら、付着したものは蒸発させながら暴力を続ける。
オールドマンの全身が、ミンチになった頃にポケットディメンションからゆうゆうと出ていった。
その後、財団の調査では、そのミンチは生きているらしいことが分かり収容される。
だが、三年経ってもまだミンチ状態のままである。

５ｔｈ　Ｔａｌｅ「赤い大鳥の丸焼き」

勇次郎は、その場を後にするとやけに厳重な扉の部屋を見つけた。
扉の隙間から見える範囲には、ＳＣＰらしき姿はなく、何故封鎖されているのか分からなかった。
「この部屋‥‥　とりあえず、入ってみるか。」
分厚い金庫の様な扉を破壊して中に進む勇次郎。
外からは見えなかった金庫を見つける。
中身を確認するため破壊すると２枚の紙が入っていた。
「文字が書いてあるな‥‥　あかしけ　やなげ　緋色の鳥よ　くさはみ　ねはみ　けをのばせ‥‥‥　!?‥‥‥　ｚｚｚ」
勇次郎は中に書いてある文章を何気なく読み上げると、強烈な睡魔に襲われ眠ってしまう。
この文章こそ、ＳＣＰなのであった。
アイテム番号：ＳＣＰ―４４４―ＪＰ、オブジェクトクラス：Ｋｅｔｅｒ、通称：認識の鳥。
このＳＣＰは文章を読み上げる事で、幻覚空間に閉じ込められる。
そこで、巨大な鳥に何度も食われる苦痛を味わう事になるのだ。
その苦痛のあまり、最初は静止している身体が現実世界で暴れ出し苦痛に歪む。
そう、この文章を読み上げてしまえば誰もが普通はそうなる。
だが、読み上げたのは地上最強の雄である範馬勇次郎だ。
外敵というものが、概ね存在しないのである。
故に、勇次郎は大の字になり、悠々とねていた。
勇次郎は幻覚空間で、気がつけば夕焼けよりも赤い空の血よりも赤い原野に放り出されていた。
そこで、とりあえず、周りを散策する勇次郎。
草も木も何もかもが赤いのだ。
そんな中、ふと、何故か空を飛べると確信する。
とりあえず、その確信に従い両手を広げると実際に飛べた。
「なかなかどうして‥‥‥　気持ちのいい物じゃねぇか。」

流石の勇次郎も空は飛べないので、飛べることに対しては感慨深いものがあったようだ。
暫くそうして、飛んでいると巨大な緋色の鳥が勇次郎目掛けて飛んでくる。
そう、例の認識の鳥である。
認識の鳥とは、現実世界ではない幻覚世界に生きている巨大な鳥である。
幻覚世界とは即ち、夢などの意識のみの精神世界である。
そして、その幻覚世界で、この巨大な鳥は最強の生物であった。
幻覚世界には、肉体の強さという概念が存在しない。
故に、勇次郎の地上最強の肉体は持ち込めないのだ。
これでは、地上最強の生物と言えども捕食対象となってしまうのか？
「こりゃあ良い。ちょうど腹が減ってた所だ。」
答えは否、否なのである。
何故ならば、肉体という概念が存在しない精神世界では心の強さが全てなのだ。
そして、勇次郎は、誰よりも自身が地上最強の生物であると疑っていない。
地震が襲った時、自分のパンチで地震を止めたと信じるエゴイズム。
これこそが、勇次郎のもう1つの強さなのである。
つまり、地上最強の肉体と地上最強の精神があってこそ地上最強の生物という訳だ。
地上最強の生物ＶＳ精神世界最強の生物。
互いに、外敵が存在しないもの同士。
互いを餌として認識し襲いかかっていく。
最初は、認識の鳥が勇次郎にクチバシで攻撃を開始する。
勇次郎の身体ほどもある巨大なクチバシである。
勇次郎、これを真正面から受け止める。
閉じようとするクチバシを、両手足で無理矢理開けば、顎が外れる

認識の鳥。
痛みから、甲高い悲鳴の様な咆哮をあげる。
さらに、勇次郎は天高く足をあげると、カカト落としで認識の鳥を地面に叩き落とした。
それにより、認識の鳥は翼を骨折し動けなくなる。
勇次郎は手頃な木をへし折り組み立てる。
そして、認識の鳥の羽を毟り、着火剤代わりにして石を2つぶつけて火を起こした。
後は生きたまま解体し、焼いて食べてしまう。
暫くすると、勇次郎は記憶が飛び気が付いたら、何もかもが赤い原野へ放り出されていた。
先程と同じ様に、空を飛べると確信して空を実際に飛ぶ。
勇次郎の戦闘能力を知った認識の鳥は不意打ちで勇次郎に攻撃する。
しかし、地上最強の精神で構成される肉体に傷を付けることは叶わなかった。
「鳥か・・・・ そうだ、久々にブラッドソーセージを作るか！」
認識の鳥を手早く叩き落とすと、生きたまま腸を引きずり出し、生き血を抜く。
川が流れていたので、腸を洗い生き血で満たして茹でる。
「血の味がして美味い・・・・・ ！」
そして、また、記憶が飛び気が付いたら赤い原野に放り出される。
認識の鳥も、大したものでその後3度挑むが、返り討ちにされ食われてしまう。
その後は、逃げに徹するもその巨体が災いして、勇次郎に捕食されてしまう。
ある時は脳髄を、ある時は肝臓を、ある時は手羽を、ある時は足を。
鳥に捨てる所なしとはよく言ったもので、毎回違う部位を生きたまま食われてしまう。
何度目か分からない頃、勇次郎は飽きたと感じた。
すると、目が覚めて、現実世界で大の字に寝ていることに気がつく。

「あー、記憶が無いが・・・・ なんだったんだ？」
その後、認識の鳥のオブジェクトクラスはｓａｆｅに格下げされた。
文章を読み上げた所で何も起きなくなったのだ。
認識の鳥は、範馬勇次郎という地上最強の生物を認識した。
そして、その恐怖から、精神世界内に閉じこもる事を決めたのだ。
勇次郎が、部屋を後にすると、今度は石の棺の様な物を見つけた。
なんだろうかと見つめていると、棺が開き何者かが出てきた。